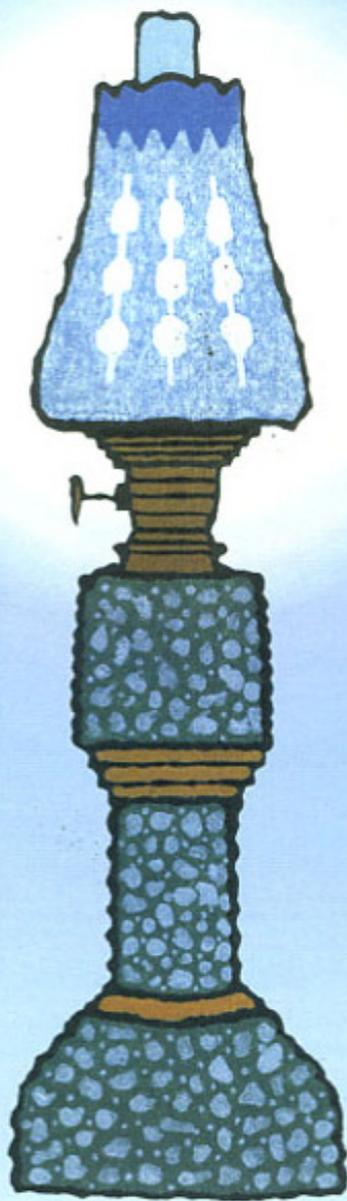


春燈

9 月号

September 2014



主宰の句

安立公彦

遙かより旦子のこゑや朝ぐもり（我孫子三句）

旦子真砂女の面影いまも涼しけれ

うた詠みの友垣つどふ夏館

筆蹟の雄ごころ悼む蓮華かな（悼・英伴さん）

水無月や師の忌に集ふ人みな老い（敦先生二十七回忌）



安住敦の句

妻がゐて子がゐて孤独いわし雲

『古曆』昭和二十九年

『安住敦全句集』に収録された三千句に及ぶ作品の中に、敦が妻子を詠んだ句が二百句余りある。妻や子の句は、敦の小市民的暮しをバックボーンにした作風の主調をなしている。掲句は、夫として父として自足しながらも、一人の男としての根元的な淋しさを詠い上げている。「妻がゐて子がゐて」の畳み込むリフレインと頭上に広がる「いわし雲」が寂寥感を増幅している。

鈴木直充

安住敦の句

秋風や暦の喪より心の喪

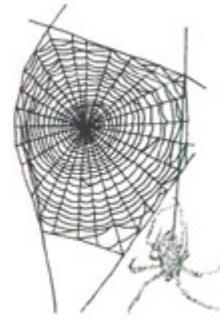
『歴日抄』昭和四十年

「百ヶ日も過ぐ」の前書がある。万太郎師急逝のはかりしれない落胆ぶりがみてとれる。生者必滅はこの世のならいとは言え、心の喪が切ない。寂寥の思いを秋風に託した「孤り」の後姿が見える。

「しよせん春燈はずつと追悼号のつもりでこそつづけられるものである」と「柿ノ木坂だより」に記された血脈の結びつきが身にしみる一句である。

諸岡孝子

燈下集



○ 木村傘休

山影を見上ぐる梅雨の別れかな（樟・禾江様）
句碑の辺のことに涼しき鶯の笛（石右衛門島）
一途なる女のともす灯や涼し（真砂女キヤラリ）
影涼し旦子語ればなほさらに（我孫子大合）
ワラヒカハセミ真顔で梅雨を嘆じけり（鳥の博物館）

○ 加藤良子

植物園先づは敦の牡丹かな
形代や願ふはいつも同じこと
旦子思へば興陽寺へと道をしへ
松落葉拾ひて詣つ興陽寺
手賀沼のベンチに暫し行々子

○ 鈴木静恵

友情の用紙賜る梅雨晴間
恩寵の極みに応ふ一句かな
夕焼や馬車の曲がりし権田原
夏の夜や説得旨き若き医師
上高地旅の諒承出でて夏

杉山の真昼の闇や梅雨に入る
青梅雨や縮緬波の山上湖
浅間嶺の雲の切れ間や梅雨の月
郭公の輪唱に覚む里居かな
チェロ奏つ乙女の指の涼しかり

○ 菊地螢子

むかし母とききし夜なかのほととぎす
どこかの国のうたよ草笛吹く人よ
今年も夏のベレーを出してかぶりけり
アカシアの花に打たれ運命に逆らはず
夏が行き人逝き思ひ出多すぎて

○ 鈴木直充

蛭袋に寝起きの水を分かちけり
あぢさゐの沈思歡喜のひと日かな
胡瓜もみ稿一枚も起こさずに
天上に飽かば戻れよ水鶏笛(倅・英伴様)
人こほし誠に蒼き蚊帳の香や

○ 高橋和女

洗ひ髪梳けば風呼ぶお六櫛
言ひにくきことば優しく単帯
シャイといふ男の美学桜桃忌
夏雲や遠出かなはぬ夫とゐて
視点変へて苦もまた楽しサングラス

○ 中村喜美子

葉がくれの雨後のあぢさゐ藍極む
梅雨深し薬の数のまた増えて
梅雨明けや猫が音たて水を飲む
空蟬や生きた証の形して
夏帯をボンと叩きて心締め

○ 柴崎甲武信

反射炉は直立不動雲の峰
竹植糸て里山守るや勢子の裔
竿ひゆんと天指し山女引き抜けり
万緑へ寮歌放吟天城越え
禅寺に長逗留の登山靴

○ 近藤牧男

池といふ大きな鏡緑さす
避暑の宿壁の写真の富士尽し
真つ直ぐに立つるつもり砂日傘
海月見てゐて水中にゐるやうな
どぜう鍋酔うて語録をふやしけり

当月集

安立 公彦選



○ 中村紀美子

単衣着て『暗夜行路』を綴りしか(我孫子)

はけ登る風の匂も芒種かな

練堀の僧院暗し朴の花

セルといふ言葉も淡し母の衣

面影をしのぶ夕べや月見草

○ 西岡啓子

ふだんてふ心にとほく滝仰ぐ

夏の灯に夫の横顔寧からむ(夫眞院)

ゆすらうめたわわや独り喫茶店

仏壇のうらに隠るる油虫

道をしへ目の前のことひたすらに

○ 齋藤晴夫

樟の葉の青き恩光聖五月

ピッケルの錆びて山恋ふ虎が雨

水の面に藍をおとして菖蒲咲く

淋しきは麦秋の午後黙す妻

老鶯昼の静寂にソ口聞かす

○ 茂木なつ

文机にも思はず濃あぢさゐ

古代蓮抽んでて宙へメールすや

夏桑歴と世界遺産を齋せり

富岡製糸場煉瓦祭々薫風裡

照る日くもる日子と七十年盆の月

○ 浅木ノエ

早乙女のみ足をすすぐ水の彩

朝練のきみの自転車青田風

青秋の風が風呼ぶ書斎かな

『仲良きことは美しき哉』夏料理

湧き水は神のささやき木下閣

春燈の句

安立 公彦選

梅雨の蝶草に沈みて草揺るる

茨城 石橋 邦子

真菰刈る男の影や敦の忌

滝落ちて離るる水の静かかな
レース編む指のささくれ動きけり

ひとしめりありし古沼や青田風

夏の蝶己が影追ひ狂ひをり
鬼灯市あの児が欲しいといふ遊び

青梅雨や細く巻きたるをんな傘

草茂り海向くポスト孤を極む(葉山)

川面にも灯を泳がせて初蛸

三重 上野 進

襟足の薄らに白き蛸狩

祈りゐる港の花火独立祭(横浜)

栗の花妻には悪しき夫ならむ

はらからの誰よりも生き苔の花

サンダルの告ぐ在不在浜の家

九十四歳祝ひ集ふや夏座敷

肌ぬぎの青年僧の色あひや

バンコク 大口 堂遊

オーデコロン密かに付くる齢となる

大蜈蚣命がけにて擱まふる
終生を山国に住み夏炉かな

紫陽花や色褪せてなほ咲く定め

老鶯や峠の宿の露天風呂

風鈴や亡き女の声そこはかと

あぢさゐや寺の奥なる芭蕉句碑

旧友の止まぬ話や夏の夜

東京 横山さくら

白南風に深く呼吸を整へり

田の畦に母が豆蒔く日暮時
みすずかる千曲川原の行々子

東京 池田 節

岐阜 小島と志



余言

安立公彦

指先に留まる蛩「夫なりや

諸戸せつ子

古来「蛩」は、恋の思いになぞらえて詠まれることが多かった。夏の夜の水辺に、幻想的な光を交わしながら飛びかう姿は、夢幻の恋情と呼ぶにふさわしい。

その蛩の一つが、差し伸べる指先に止まり、いつまでも去り遣る気配を見せない。作者はその蛩に亡き夫を思い、いつかそれをまぎれもない亡夫の魂の化身と思ひ込むのだった。控え目な表現の中に、亡き夫への思いが、美しくしかし確かな姿で映し出されている。

手さぐりに編む達三遺句集梅雨深し 滝沢 幸助

この遺句集は、平成二十五年七月十日に逝去された、会津大寧寺句会の、森谷達三さんの句集である。滝沢さんの指導のもと、病気に苦しみつつ、誠実な作品を次つぎと発

表された。私が達三さんを知り得たのは、平成二十四年の四月、会津若松に参上した僅か二日の間だけだった。

瘦身の達三さんは十分な食事も摂り得ず、傍目にも病気の進行が伺えた。しかしそういう思いを外に出すことなく、ひたすら俳句に打ち込む姿勢は立派だった。

目下滝沢さんの許で遺句集が編集されている。「手さぐり」という言葉には幾多の思いが感じられる。善い遺句集の上梓を信じている。師弟愛という詞を思う。

句碑の辺のことに涼しき鳶の笛 木村 傘休

「仁右衛門島」の前書がある。この句碑は平成七年三月建立の、鈴木真砂女先生の、へあるときは船より高き卯浪かなの句碑。安房鴨川に隣接する仁右衛門島の島主、平野仁右衛門邸の傍らに建つ。

仁右衛門島はささやかな島だが、句碑の島と呼んでも良い。秋桜子、風生、真砂女、眸、秋光、秀穂女、そして芭蕉の句碑もある。この句、「ことに涼しき」が、作者の真砂女への敬愛の思いを伝える。この地はまた鳶も多い。

蛩袋に寝起きの水を分かちけり 鈴木 直充

「蛩袋」とは言い得て妙。例年梅雨とともに、ふつくら

とした筒状の花をうつ伏せに咲かせる。わが家にも紅紫色と白色の蛍袋が咲く。「華筒の中に蛍を入れて子供たちが遊ぶ」という解説も首肯される。

この句、その蛍袋に、「寝起きの水を分かつかつ」という表現がみごとだ。多分手許で育てている蛍袋だろう。朝風にかすかに揺れるその姿は、他の花のように只咲いているのではなく、主に語りかけるような風情を持つところがいとしい。作者のこの花への思いがよく表現されている。

みなづきや青き灯のつく清州橋 三宅 文子

「みなづき」は陰暦六月、陽暦七月に当たる。周知のことである。周知のことを殊更に書くのは、みなづきと七月の語感について考えたいためだ。仮にいま「七月や」とすると一句の語感が変わる。下五に「清州橋」という名詞が付くため一句を通して読むとき、語感の固さが感じられてくる。「シチガツ」「キヨスバシ」という濁音の故だ。「ミナヅキ」も濁音が入るが、「ツ」は「ガ」より柔らかい。この句、「みなづきや」とあってこそ、「青き灯のつく清州橋」を十分に活かし得ている。「青き灯」もいい。

俳句もて訣れの言葉みどりの夜 中野さき江

中野英伴さんの逝去は去る六月十六日だった。通夜は六月二十三日。笑顔の遺影を見ていると、今にもお元気な頃

の英伴さんの名乗の声が、ありありと聞こえてくる思いがするのだった。直後のさき江さんのお話では、「癌の苦痛もなく静かな最後」とのことだった。

英伴さんは最後の病床にあつて、九月号の草稿を自らしたためていた。今月号の「遺稿」がそれである。へつりしのご妻との訣れ未練濃く、へ夜は夜かぜ香のしあはせや洗ひ髪、またへあと死を持つばかりの身涼しき夜。「俳句もて訣れの言葉」である。「あとは死を待つばかりの身」と、自身の死を語る。死を予感することは有り得ても、諾うことは出来ないのが一般である。英伴さんは最後まで強い信念を持つ人だった。今更に「みどりの夜」、「涼しき夜」と、一句の季語の清かさにこころ打たれる。

ひとときの過客に優し青田風 竹内 慶子

清冽な句である。都会の雑踏を遠く離れた旅人の眼に、青あおとうち揃う青田の景は、ことに懐かしく優しく映る。しかし旅人はいつまでも青田の風に身を置くことは出来ない。いつかはその地を去らねばならない。「ひとときの過客」が良く情景を言い得ている。

作者は昨年夫君を亡くされてから用務がふえ、遠出もままならないと聞く。この句、先の伊賀上野の関西大会などに参加が適わなかったことから、自ずと身を過客に置く思いが昂じて得た作品か。句心の大切さを示す一句だ。